



<恵慶百首>浅香山秋冬部試注

著者	福田 智子, 今井 明, 黒木 香, 竹田 正幸, 田坂 憲二, 南里 一郎, 西原 一江
雑誌名	文化情報学
巻	1
号	1
ページ	1-14
発行年	2006-03-20
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000010933

〈惠慶百首〉 浅香山秋冬部試注

福田 智子、今井 明、黒木 香、竹田 正幸、
田坂 憲二、南里 一郎、西原 一江

惠慶法師は、中古三十六歌仙にも数えられている、十世紀を代表する歌僧である。家集「惠慶集」の末尾には、百首歌が収められるが、本稿ではそのうち、「あさかやま」「なにはづ」の歌の一字ずつを歌の上下に置いた杳冠歌、全三十一首中の「秋冬部」十首について、注釈を施す。

凡例

一、歌番号 注釈のはじめに、惠慶百首における通し番号を示し、あわせ
て（ ）付きで資経本惠慶集における歌番号〔私家集大成〕中古I所
収「惠慶集」の歌番号と一致）を示す。

二、本文 底本は、冷泉家時雨亭叢書第六十七巻『資経本私家集三』（二〇
〇三年十二月刊）所収、資経本惠慶集とする。漢字仮名の区別、仮名遣
い、おどり字も底本のままとし、濁点も付さない。

三、校異 『惠慶集校本と研究』（熊本守雄氏、桜楓社、昭和五三年）に収
められた以下の影印本を用い、語の異なりのほか、表記の違いも示す。

○書陵部一五〇・五五八本

略称（書古）

○越桐喜代子氏蔵（前田家旧蔵）本 略称（前）

四、語釈 見出し語は、底本の表記のまま掲げる。ただし、歴史的仮名遣
いに改めたり、濁点を付したりする必要のある場合には、見出し語の次
に（ ）を付けて示す。

五、別出 歌集の正式名称〔新編国歌大観〕の目次に拠る）、巻数、部立、
歌番号、歌題、詞書、詠者名、歌、左注を、順に列挙する。

六、考察 考察中での和歌の引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌集
名・部立・歌番号・詠者名・詞書）とする。なお、『万葉集』の番号は、
旧・新の順で表記する。

注釈

六一 (二五六)

【本文】

秋

ゆるかりしかせのをとこそはけしけれいまはわせあきになりぬとおもへは

【校異】○かせ―風(前) ○わせ―わ^せ(前) ○おもへは―思へは(書古)(前)

【語釈】○ゆるかりし 「し」は直接経験した過去の出来事を表す助動詞。

緩やかだった、勢いが弱かった、の意。 ○わせあき 「わせ」は成熟な

どが早い意であろうが、「わせあき」の他例は見えない。初秋の意か。なお、

『夫木抄』は第三句を「今はた秋に」に作り、「わせあき」の語はない。

【通釈】

秋

今まで緩やかに吹いていた風の音が激しく聞こえることだ。今は早稲の実
る初秋になったと思うと。

【別出】

『夫木和歌抄』巻第十、秋部一、三九〇八番

(初秋)

家集 秋歌中

恵慶法師

ゆるかりし風の音こそはけしけれ今はた秋に成りぬと思へば

【考察】

吹く風の音によって季節の移り変わりに気づいたことを詠んだ「あきき
ぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」(古今集・秋

上・一六九・藤原敏行朝臣・秋立つ日よめる)は著名であり、同様の発想は、恵慶と同時代にも、「なにはがたあしのうらばをふきかへすかせのおとしるき秋ぞきぬらし」(能宣集・二二一・六月つごもりがたに、すみよしにまうでてかへりはべるに)に見られるが、この恵慶歌は逆に、秋になったと思うと、風の音の変化が自覚されるという歌である。

先の能宣歌は、さわやかな秋風を感じ取っているが、当該歌の風は「はげしいものである」。「月はよしはげしき風のおとさへぞみにしむばかり秋はかなしき」(後拾遺集・秋下・三三九・齋院中務・選子内親王いつきときこえけるととき九月のとをかあまりにあか月ちかうなるまで人人ながむるに、さしかたゆくすゑもかかるよはあらじなどいひてよみ侍ける)、「秋のうちにはあはれしらせし風のおとはげしさそふる冬はきにけり」(千載集・冬・三九三・崇徳院御製・百首歌めしける時、初冬の心をよませ給うける)のように、風の音が激しく聞こえるのは、通常、晩秋から初冬にかけての時期である。一方、「かすが野はをはぎつみけりなら山のこのはるかぜのゆるく吹くらし」(新撰和歌六帖・二二四二・為家・をはぎ)、「朝まだきゆるけき風のけしきにて春たちきぬとしられぬるかな」(堀河百首・七・仲実・立春)に見られるように、風が「ゆる」く吹く季節は、一般に春である。とすれば、当該歌は、晩夏から初秋へという季節の移り変わりを、「ゆるかりし」から「はげしけれ」という極端な風の強弱として表現したところにも、恵慶の工夫があるのかもしれない。

第四句「わせあき」は他に用例を見出せない。「わせ」は、「きのくにのむろのはやわせいでもしめをばはへよもるとしるがね」(古今六帖・第五・二六〇八・しめ)、「わがやどのかどたのわせのひつちほを見るにつけ

てぞおやは恋しき」(好忠集・二〇一・七月中)という用例があり、惠慶自身も《惠慶百首》中に「かどたわせ昨日かりそむと思ひしをひつちのとくもおひにけるかな」(惠慶集・二九二・つちのと)と詠んでいる。また、「わせ」の母音交替形「わさ」の用例には、「さをしかのつまつ山のをかべなるわさ田はからじ霜はおくとも」(古今六帖・第一・六七三・ただふさ・しも)があげられる。惠慶は「早稲が実る初秋」という意味の語「わせあき」を造語し、自身の歌に用いたか。

「なりぬと思へば」という語句は、結句に置かれることが多い。当該歌と同じく、第二句に係助詞「こそ」、第三句にその結びを置いた、「あきかぜにあふたのみこそかなしけれわが身むなしくなりぬと思へば」(古今集・恋五・八二二・小町)、「夜くればわかたけくこそおもほゆれねどきのほどになりぬと思へば」(大斎院前の御集・一〇七)という歌が存するのは興味深い。特に前者は、秋風を詠んだ歌であり、惠慶が影響を受けた可能性も考えられる。

六二 (二五七)

【本文】

るいしつゝいさあきのゝにわかせこかはなみるみちにわれおくらすな

【校異】○あき―秋(前) ○みちに―道を(前) ○おくらすな―をくらすな(前)

【語釈】○るいしつゝ 「るいす」は連れ立つ、伴う。「つゝ」は動作が継続して行われるのと並行して他の事態が存在することを表す助詞。…し続けて、…ながら、…て。 ○いさ(いざ) 人を誘う、あるいは自分が行

動を起こそうとするときに用いる語。さあ、どれ。 ○せこ 男性一般を親しんで呼ぶ語。『万葉集』に多く用いられる。「わが」を冠して用いることが多い。 ○みち 道路、目的地までの道程、途中。 ○おくらす 遅れるようにする。置き去りにする。あとに残す。

【通釈】

連れ立って、さあ秋の野に行きましょう。私の夫が花を見る道に、私を置いて行かないでください。

【別出】なし

【考察】

花見に出かけようとする夫に、自分も伴ってほしいと願う妻の気持ちになつて詠んだ歌である。

初句「るいしつゝ」の「るい(す)」は、当該歌のような動詞の用例を、他に見出せない。名詞の例は、「るいよりもひとりはなれてとぶかりのともにおくるわが身かなしな」(好忠集・四三二)、「るいよりもひとりはなれてする人もなくこえんしでの山道」(和泉式部集・三〇八)がある。惠慶歌は、特に好忠歌の発想に通じるものがあり、直接の影響関係が考えられよう。

「わがせこ」は『万葉集』に多用された語句である。好忠歌にも「わがせこ」と「われ」を同時に詠み込んだ、「わがせこがわれにかれにしゆふべよりよさむなる身のあきぞかなしき」(好忠集・二二二・八月上)がある。「はなみるみち」の用例は、同時代には見られない。時代が下ると「いまでもこれすぎても春の面影は花みる道の花色」(拾遺愚草・一一二・二見浦百首・春廿・道)がある。

取り残される意の「おくらす」には「いもがめをみそめのやまの秋はぎはこの月比はおくらすなゆめ」(古今六帖・第六・三六四八・大とものさかの上女郎・秋はぎ)がある。秋の野の花を詠んでいるところは、当該歌の景物と重なるものがあるが、その「秋はぎ」を「おくらすな」とする点、当該歌とは対照的である。

さて、わがせこが見物に行こうとする秋の野に、妻が自分も連れて行ってほしい理由は何であろうか。「秋ののはみちもゆかれずともすれば花のあたりにめのみとまりて」(古今六帖・第二・一一二六・のべ)という歌があるが、この歌の場合、彼の目を奪っている美しい花は女性を比喻していると考えられる。秋の野に咲く花といえ、秋ののになまめきたてるをみなへしあなかしかまし花もひととき」(古今集・俳諧歌・一〇一六・僧正へんぜう)と詠まれるように、女郎花がその代表であろうか。とすると、野に咲く美しい花(女性)と夫との間柄に危惧の念を抱いた妻が、「われおくらすな」と願い出たという解釈が成り立ちそうに思われる。

六三 (二五八)

【本文】

山ものもからくれなゐになりぬればたかそめしそと見る人そとふ

【校異】○山もの―やまもの(前) ○なりぬれば―なりゆけは(前) ○

そめしそと―そめしとそ(前) ○見る人そ―みる人そ(書古) みる人も

(前)

【語釈】○山ものも 山も野も。 ○からくれなゐ 韓紅、唐紅。深い紅色。染め色の美しいことで、特に賞美された。 ○たかそめしそと(たが

そめしぞと) 「誰が染めしぞと」で、誰が染めたのかと、の意。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。

【通釈】

山も野も深い紅色になったので、誰が染めたのかと見る人がたずねる。

【別出】なし

【考察】

初句に見える「山ものも(山も野も)」という歌句を詠み込んだ歌には、「秋風のうち吹くからに山ものもなべて錦におりかへすかな」(後撰集・秋下・三八八・よみ人しらず・題しらず)、「やまも野も夏草しげく成りにけりなどかまだしき宿のかるかや」(順集・一一)があり、また逆に「野も山もの」の例も、「秋風のうちふくからにのやまもなべてにしきにおりかへすかな」(古今六帖・第五・三五二二・ただみね・にしき)などが見出せる。「後撰集」の歌は山も野もおしなべて「錦」となる情景を詠むが、恵慶歌はそうした「錦」の織物と捉えられた情景を「からくれなゐ」の染め物へと転換したものである。

また、山もしくは野が「からくれなゐ」に染まったと詠む歌には、『古今六帖』第五・三四九九番にも見える「秋山はからくれなゐに成りにけりいしくしほしぐれふりそめてけん」(寛平御時中宮歌合・秋七番左・一四)や、「あきのはからくれなゐになりにけりしかふりいでてなきそめしより」(元真集・一六九)などがある。恵慶はこうした先行の表現あるいは同時代的な表現を踏まえて、一首を構成したものとと思われる。

第四句の「たがそめしぞと」については、類同の歌句を好忠の「たがそめしいろにかあらむはるくれどめなれずみゆるまつのみどりは」(好忠集・

二九) という歌に見出すことができる。この好忠歌は松の緑色を対象にしたものであり、惠慶の歌の「からくれなゐ」とは色彩の対象が異なるが、両歌の着想・発想は共通している。ここでもまた、好忠歌と惠慶歌との表現上の緊密な関係が確認できる。

六四 (二五九)

【本文】

松かせもうちうらめしきほとなれはみねのもみちもまゝにほふなり

【校異】○松かせ—まつかせ(書古)(前) ○うちうらめしき—うらくめしき(前) ○ほとなれは—ほとなれと(前) ○まゝにほふなり—まゝに日のみゆ(前)

【語釈】○松かせ(松かせ) 松の木に吹く風。○うちうらめしき「うち」は接頭語。動詞に冠して、その意味を強めたり、語調を整えたりする。

また「うらめしき」は、動詞「うらむ」が形容詞化した語。恨みに思うさま。残念だ。○まゝ(まま) 「にほふ」を修飾する副詞「まま(間々)」か。とすれば、時々、折々の意。○にほふ 色が際だつ、または美しく映える。

【通釈】

松の木に吹く風も恨みに思われるころなので、峰の紅葉も時々美しく映えるのである。

【別出】なし

【考察】

上の句と下の句は、「松かせも」の「も」と「みねのもみちも」の「も」

によって対応・呼応させられている。当該歌のおもしろさは、松風の「うちうらめしき」様態が、峰の紅葉の「ままにほふ」様態を引き起こす関係にあることを発見した点にある。ただし、「ままにほふなり」という歌句は類例がなく、その意味内容を的確に説明することがむずかしい。

「まま」について【語釈】では副詞としたが、現代の代表的な辞書を見ても、副詞「まま」の用例は鎌倉時代のもを初出とし、平安時代に遡る例は見出されない。そうした点、平安時代の惠慶歌に、副詞の「まま」が用いられたと推断することには問題が残ろう。【校異】にあるように、前田家旧蔵本の本文は「ままに」とあり、こちらの方が平安時代の語形としてはより一般的なものである。もちろん、「ままに(儘に)」と「まま(間々)」ではそれぞれ意味内容が異なるが、ここでは底本の本文に従って解釈を試みた。

また、上の句の「うちうらめしき」という表現も類例を見出すことができない。和歌において形容詞「うらめし」は常套的に用いられる語であるが、接頭語「うち」を冠した「うちうらめしき」という歌句は他例がない。意味としては「うらめしき」と大差はないが、【校異】に掲げた本文「うちうらめしき」と併せて、注意しておくべきであろう。

以上整理すると、紅葉を散らす松風が吹き、恨めしく思われるころ、峰の紅葉もその美しさを時々しか現さないことを詠んだ歌と捉えた。松風ではないが、風と形容詞「うらめし」が詠み込まれた歌には、「秋風の吹きうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな」(古今集・恋五・八二三・平貞文・題しらず)、「わがせこがきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめしきかな」(拾遺集・恋三・八三三・曾根好忠・三百六十首のなかに)な

どがある。惠慶歌の表現を考える際、好忠歌は重要なものであろう。また、『新編国歌大観』を検すると、峰の紅葉を詠んだ惠慶歌には、当該歌のほかに、「からにしきおりつむみねのむらもみぢ見そむるけふはあからめもせず」(惠慶集・一〇一)、「ひらのやまもみぢよのまはいかならむみねのむらかぜうちしきりふく」(惠慶集・二二五)、「吹く風にすまひやすらむ神なびのうらこの山のみねのみぢば」(惠慶集・二二八)、「のこりなくみねのもみぢもちりにけり秋よびかへせ山の山びこ」(惠慶集・二七〇)などがある。特に二二八・二七〇番歌は、(惠慶百首)の歌であり(本試注では二三(二一八)・六五(二六〇)番)、惠慶が峰の紅葉を題材に様々な表現を試みていることがわかる。この歌も、そうした惠慶の和歌表現の試行の跡が深く刻印されたものと思われる。

六五 (二六〇)

【本文】

のこりなくみねのもみぢもちりにけりあきよひかへせやまのやまひこ

【校異】 ○あき―秋(前) ○やまのやまひこ―山の山ひこ(前)

【語釈】 ○よひかへせ(よびかへせ) 「呼び返す」は、元の場所へ帰って来させる、引き返させる、呼びもどす意。 ○やまひこ(やまびこ) こだま。「平安時代に入ると、夏歌としてほととぎすや時雨とともに詠まれるほか、基本的には恋歌の副素材として多用される」『歌ことば歌枕大辞典』(西前正芳氏)が、ここでは晩秋の歌に用いられている。

【通釈】

峰の紅葉も残らず散ってしまった。秋を呼び戻してくれ、山の山彦よ。

【他出】

『夫木抄』巻第十五、秋部六、六三一八番

(九月尽)

家集、秋歌中

惠慶法し

のこりなく峰のもみぢも散りにけり秋よびかへせ山の山びこ

【考察】

散ってしまった紅葉を惜しみ、過ぎ去った秋を山彦に命じて呼び戻そうと詠んだ歌である。

「のこりなく」散るものといえは、「のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世中はてのうければ」(古今集・春下・七一・よみ人しらず・題しらず)に見られるような、桜のイメージが強く、ほかにも「さかりなる花のさかりも物ぞおもふちにし枝ののこりなくなく」(道命阿闍梨集・二二・へうせにける人のはらからの、いみじうさいはひすぐれてさかへののしるに、かのうせにし人のめのとがりやりし)返し)などが挙げられる。その点、惠慶の当該歌は一線を画すが、「神な月 しぐれふりくる み山より 風さへことに おくれねば よものこのはも のこりなく ながむるそらもはれずのみ くもりわたれば ……」(好忠集・二七七・冬)というように、好忠も木の葉について用いている。時代はやや下るが、「のこりなく秋はとまらず山かぜに木末あらはに紅葉ちりつつ」(定頼集・一三四・九月つごもりの日、権大納言の御もとよりある)という歌もある。

第二・三句の「みねのもみぢもちりにけり」には、まったく同じ句を有する歌がある。「もる山の峰のもみぢもちりにけりはかなき色のをしくも有るかな」(古今六帖・第六・四〇七六・紅葉)であるが、この歌は後に『玉

葉集』卷第十六雜歌三、二二九一番にも収められ、ここでは詞書と作者名を、「もみぢ葉を」といふ五文字を句のかしらにおきてよめる 貫之」とする。この『玉葉集』の記述を信ずるならば、惠慶が自らの百首歌詠作に際し、貫之の折句歌から、二句まるごと採り入れていることになる。

「よびかへ(せ)」という語を用いた歌で、おそらく最も知られているのは、「我が背子をならしの岡のよぶこどり君よびかへせ夜のふけぬ時」(拾遺集・恋三・八一九・山辺赤人・題しらず)であろう。『万葉集』初出で、『拾遺抄』『古今六帖』『赤人集』『夫木抄』『定家八代抄』『五代集歌枕』『歌枕名寄』ほかに重出する。惠慶以前の用例としては、「あかずしてすぎゆくはるをよぶこどりよびかへしつときてもつげなん」(興風集・六六・亭子院女八宮歌合に)もあり、「よびかへ(せ)」という語とともに詠まれるのは「呼子鳥」であった。惠慶の当該歌は、この興風歌の「春を呼び返す呼子鳥」をもとに、季節や景物をずらして作られているように思われる。「山彦」は、【語釈】で述べたとおり、平安時代には夏の景物として詠まれるのが一般的なのである。すると惠慶は、「秋を呼び返す」ものとしての「山彦」を、独自に発想したと言つていいのかもしれない。

結句の「やまのやまびこ」は、まず「そま人は宮木ひくらしあしひききの山の山びこよびとよむなり」(古今集・墨滅歌・一一〇一・つらゆき・ひぐらし)という物名歌に見える。先の第二・三句「みねのもみぢもちりにけり」の場合と同様、貫之の言語遊技性の高い歌との間に、語句の共通性が指摘される。他にも、「なげきこるをのひびきのきこえぬは山のやまびこいづちいにしぞ」(興風集・四二二)、「よも山のやまの山びこなければやわがよぶ声にこたへだにせぬ」(古今六帖・第一・九九五・やまびこ)、「もろこ

しの山の山びこききつけてそよやといふまでひびきたへん」(宇津保物語・楼上下・九八〇・仲忠)といった歌が、惠慶と同時代、もしくはそれ以前の用例として列挙できよう。

六六 (二六一)

【本文】

冬

みて河のけふなみのときこえねはふゆのはしめとこほりすらしも

【校異】○みて河の—みてのかは(前) ○けふ—けふは(前) ○きこ

えねは—きこえぬは(前)

【語釈】○みて河(みて河) 『新編国歌大観』によれば、「みてのかはなみ」「みてのかはせ」「みてのかはべ」といった例は見えるものの、「みてかは」は唯一例。異文「みてのかは」も、他例を見ない。○きこえねは(きこえねば) 動詞「聞こゆ」の未然形「きこえ」に、打消の助動詞「ず」の已然形「ね」、接続助詞「ば」が下接したもので、順接の確定条件「聞こえないので」の意。異文「きこえぬは」だと、「ず」の連体形「ぬ」に係助詞「は」が下接したものとなり、「聞こえないのは」の意となる。○こほりすらしも 「らし」は、確実な根拠に基づいて、現在の事態を確信的に推量する意。ここでは、波音が聞こえないことから、川が凍ったと推量した。「も」は感動を表す終助詞。上代には多く用いられるが、中古以降の用例は少ない。

【通釈】

冬

今日は、井手川の波の音が聞こえないので、冬の初めということ、どうやら凍っているようである。

【他出】

『歌枕名寄』巻第三、雑篇、八八三番

(井手 河 岩橋 沢 渡 山 山田 里 中道)

(河)

恵慶

井で川の夕波のおときこえねば冬のはじめのこほりすらしも

【考察】

井手川の波音が聞こえなくなったことから、川水が凍つたと推量し、冬のはじめを実感する歌である。この発想はつとに、菅原道真の漢詩にも、

「氷封水面聞無浪(こほりすいめんにはうじてきくにみななし) 雪点林

頭見有花(ゆきりんとうにてんじてみるにはなあり)」(和漢朗詠集・冬・

三八四・菅・氷 付春氷)と見えるところである。ちなみに好忠も、「すず

かがはやそせのなみのおとなきはこほりやせせにむすびとめつる」(好忠

集・三六二・十二月をはり)という同様の発想の歌を詠んでいる。当該歌

においては、『恵慶集』諸本共通して「けふ(今日)」の語を有し、立冬の

意識を端的に表現しているが、『歌枕名寄』所載本文では、第二句が「夕波

のおと」になっており、「けふ」がない。異文発生の理由は、「け」と「ゆ

とのくずし字体の類似とともに、「けふなみのをと」という第二句中の「け

ふ」という語の据わりの悪さも、あるいはあつたのであろうか。

その当該歌に酷似した歌が、『好忠集』所収(順百首)に見える。「あせきよりも水のおとのきこえぬは冬にければこほりすらしも」(好忠集

〈順百首〉・五四九)は、「百首歌中、「あ」で始まり「も」で終わる歌とし

て詠まれており、恵慶の当該歌と同じである。「あせき」と「あで河」の相違はあるものの、水音がしないことで、氷が張る冬になったとする着想が、ぴったり一致する。これに対し、〈好忠百首〉の同じ位置の歌は、「いでやまよそながらにも見るべきをたちなへだてそみねのしら雲」(好忠集・四三五)であり、恵慶歌と「い(あ)で」という地名が共通するけれども、歌の着想や内容は異なる。

さて、『語釈』で述べたとおり、「あで河」やその異文「あでのかは」の用例は未だ見出し得ない。けれども、「春ふかみあでのかは浪たちかへり見てこそゆかめ山吹の花」(拾遺集・春・六八・源したがふ・天曆御時歌合に)、

「そこきよく井手の河瀬にかげみえていまさかりなるやまぶきのはな」(長

能集・一三五・花山院の歌合にめししかば) 款冬)、¹⁾「春の日は行きもやら

れずかはづなくあでのかはやに駒とどめつつ」(夫木抄・卷三十・雑・一四

四一三・重之・あでのかはや 百首歌)、「枝たわにやへ山吹は咲きにけり

井での河べをおもひやるかな」(兼盛集・一八〇・あちの御屏風のれう、)

山ぶきおひたる所)というように、「かは浪」「河瀬」「かはや」「河べ」と

いうかたちならば、恵慶と同時代人の歌に、少なからず存する。いずれも

「山吹」や「かはづ」と組み合わせられており、通常の「井手」詠と同様で

ある。一方、恵慶の当該歌には、「井手」ゆかりの景物がない。やはり、沓

冠歌として「あ」で始めなければならぬため、地名「あで」を用いたもの、

冬部に配置されるべき歌でもあり、通常の「あで」詠の枠からはみ

出してしまったものと思われるが、その点、前掲の『好忠集』四三三五番歌

と軌を一にするものがある。

「なみのおと」に季節の移り変わりを聞き知る歌としては、「浪のおとの

けさからことにきこゆるは春のしらべや改るらむ(古今集・物名・四五六・安倍清行朝臣・からことといふ所にて春のたちける日よめる)が挙げられよう。「けさ(今朝)」という、時を限定する語が用いられており、当該歌が「けふ」を用いていたのと同様の発想であろう。

「ふゆのはじめ」という語句は、意外に少ない。惠慶の頃の用例としては、「神な月ふりみならずみ定なき時雨ぞ冬の始なりける」(後撰集・冬・四四五)、「かぜはやみ冬のはじめは山がつのしづの松がきまなくぞゆふ」(祐子内親王家紀伊集・六二・左京の権大夫百首のうち)、「ふゆのはじめ」などが挙げられるであろうか。ちなみに、『新編国歌大観』を検すると、「はるのはじめ」「なつ」「あき」「ふゆ」の用例数は、各々延べ九二例、三例、四〇例、二九例である。

結句「こほりすらしも」は、惠慶と同時代の用例は稀で、前掲『好忠集』〈順百首〉五四九番歌の他は、かろうじて「わかかへりたぎりて見ゆる山川も冬にはあへずこほりすらしも」(保憲女集・一一七・ふゆ)を挙げるにとどまる。〈順百首〉歌、当該歌ともに、沓冠歌として「も」で終わらなければならぬという制約上、終助詞「も」を用いたものであろうが、結果として、上代風の古めかしさが表れているよう。

六七 (二六二)

【本文】

のとかにはまちとをなりしあらたまのとしのおいゆく冬はきにけり

【校異】

〇のとかには―のとかにて(前)

【語釈】〇のとか(のどか) さしせまった感じや、きわだった動きがな

く、静かで穏やかなさま。〇まちとを(まちどほ) 待ち遠しいさま。〇あらたまの「とし(年)」にかかる枕詞。〇おいゆく だんだん年を取っていく意の「老い行く」であろう。

【通釈】

新年を迎えるとき、穏やかに待ち遠しかったその年が暮れてゆき、私もまた年老いてゆく冬が来て、心穏やかでないことだよ。

【別出】なし

【考察】

年の暮れと老いを詠んだ、惠慶と同時代の例としては、「いとどしくおい行く冬はをしまれてありはかはらぬ春を待つらん」(元輔集・一九〇・正月七日ばかりに人のもとに)や、「あさかやま」「なにはづ」の沓冠歌、「あらたまのとしくれゆけばおいにけりこころほそくもみゆるくものい」(好忠集〈順百首〉・五五二)がある。とくに後者は、当該歌と表現上、直接の関係をもってよいであろう。また、これらの歌の着想に先行するものとして、「あらたまの年のをはりになることに雪もわが身もふりまさりつつ」(古今集・冬・三三九・在原もとかた・年のはてによめる)がある。

初句「のどかには」の「は」が解しにくい。何かと対比されていると考えるべきであろうが、未考である。「こ」ではいちおう「は」を訳出せず、「【通釈】のように考えておく。「のどかには」の句をもち、解釈の参考になる歌が管見に入らない。

「のどか」の勅撰集における用例は、「夢にだに見る事ぞなき年をへて心のどかにぬるよなれば」(後撰集・恋一・五三八・題しらず・よみ人も)、「うきしづみふちせにさわぐにほどりはそこものどかにあらじとぞ思ふ」

(後撰集・恋六・一〇二七・あつよしのみこ・女三のみこに)が早い。平安時代前期の例はあまり見出せず、中期以降から用例が増加する。十世紀までならば、『好忠集』に七首(一三九・四三四・五六二・五六六・五七二・五七四・五八二番)を拾え、数が突出して多い。その中には、当該歌と同じ「あさかやま」「なにはづ」の杳冠歌、「のどかにもおもほゆるかなどこなつのひさしくにほふやまとなでしこ」(好忠集・四三四)、「のどかなる時こそなけれふじの山いつかはたえんもゆるおもひの」(好忠集・順百首・五六二)もある。また、『好忠集』中の〈順百首〉に五例(五六二番歌以降)見られることにも注意しておきたい。

第二句の「まちどほ」は、平安時代の用例が豊富である。「うゑし時花まちどほにありしきくうつるふ秋にあはむとや見し」(古今集・秋下・二七一・大江千里・寛平御時きさいの宮の歌合のうた)、「立ちぬとは春はきけども山里は待どほにこそ花は咲きけれ」(貫之集・二九七)が、ごく初期の用例であろう。恵慶と同時代には、「春をへて春まちどほにみゆるには秋のたのみはなくはこそあらめ」(元輔集・一七二・なかふんがもとよりのぞみのえならぬを、花につけてとぶらひて侍りしかば)や、順の杳冠歌「まちどほに思ひしあきはふけにけりしるくぞみゆるはぎのした露」(好忠集・順百首・五四七)がある。

六八 (二六三)

【本文】

あけかたきふゆのよなくこひすれはねられさりけりやまさとのいほ

【校異】〇こひすれは—恋すれは(前) 〇やまさとのいほ—山さとのいほ

(前)

【語釈】〇よなく(よなよな) 每晚。夜ごと。連夜。〇いほ 粗末な家。僧・隠者などの仮住まい。前田家旧蔵本の異文について、熊本守雄氏『恵慶集校本と研究』は、「山さとのいほ」の「お」を見せけち、「ほ」の書き入れを翻字して、「山さとのいほ」とする。影印で確認すると、「お」と「い」との間、行の右寄りに「ほ」と書いてある。「ほい」と読むべきかとすれば、「布衣」が想定されようが、これでは歌意が通じない。

【通釈】

なかなか明けない冬の夜ごと、人を恋する思いが募るので寝られないことだ。寂しい山里の庵では。

【別出】なし

【考察】

一見して解しやすく、『好忠集』をはじめ、表現の関連が認められる歌も多い。ただ、結句が「浅香山難波津」杳冠歌の条件を満たしていないという問題がある。

恋のために寝られない、または目が覚める、という着想は、恵慶と同時代の歌にも、「よるとてもねられざりけり人しれずねぎめのこひにおどろかれつつ」(拾遺集・恋三・八〇一・題しらず)、「いさやまだこひてふ事もしらなくにこやそなるらにいこそねられね」(拾遺集・恋四・八九六・よみ人しらず)の例がある。さらに、冬の夜に人を恋うという歌として、好忠に、「あきはててしぐれふりにしわがつまを冬のよすがらこひあかしつつ」(好忠集・三二三・中の冬、十一月上)がある。

第二句の「ふゆのよなよな」は、当該歌や、好忠の「きみまつとねやの

いたどをあけおきてさむさもしらず冬のよなよな」（好忠集・三四一・くれの冬、十二月はじめ）が初出と考えられよう。もつとも、「あきのよなよな」ならば、「うき事を思ひつらねてかりがねのなきこそわたれ秋のよなよな」（古今集・秋上・二二三・みつね・かりのなきけるをききてよめる）が古いし、惠慶と同時代にも「をみなへしにほふあたりののをしめてあきのよなよなたびねをぞする」（能宣集・二三七・人のもとにまかりてものなどいひて、をみなへしをりてすだれのうちにさしいるとて）がある。秋の夜を冬に置き換えたのは、惠慶か好忠あたりの着想なのであろう。

結句の「やまざとのいほ」であるが、ここは「難波津」の歌の「いまははるべと」の「い」で終わる歌にあたる。そこで、前田家旧蔵本にある異文「やまざとのおい」（山里の老い）を原態と考えてみたくなるが、他に例を見ない句であるし、一首の解釈も難しくなる。「やまざとのいほ」という句も、同時代までに例はないが、惠慶や好忠に、「山ざとのしばのいほりもふゆくればしらたまふける心ちかもする」（惠慶集・二八三・冬）や、「しばきたくいほりにけぶりたちみちてたえずものおもふ冬のやまざと」（好忠集・三〇〇・十月はて）といった、冬の山里の「いほり」を詠んだ歌があり、素材としては同一とみてよいだろう。ここでは、杵冠の条件に合わないが、底本の本文を採って解釈しておく。

なお、『好忠集』の「浅香山難波津」杵冠歌群に、「あればいとふなければしのぶよのなかにわが身ひとつはすみわびぬやは」（好忠集・四三七）という歌があり、これも、「い」で結ぶべきところをそうしていない。この歌には、結句を「すみわびぬやい」とする異文があり、富士谷成章『あゆひ抄』はこちらを採って、「すみわびぬやは」について、杵冠歌にならないの

で「本意にあらざ」という。詳しくは、日本古典文学大系80『平安鎌倉私家集』岩波書店、一九六四年九月）「好忠集」補注、藏中スミ氏『曾丹集』の享受——富士谷成章の場合——」（谷山茂教授退職記念国語国文学論文集、昭和四十七年十二月）、神作光一氏・島田良二氏『曾補好忠集全釈』（昭和五十年十一月、笠間書院）を参照されたい。

六九（二六四）

【本文】

さらしなやゆきのうちなる松よりもはかなきものはわかたのむつま

【校異】○松—まつ（書古）（前） ○はかなき—はけしき^{るけき}（前）

【語釈】○さらしなや 「さらしな」は信濃国の歌枕。「わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」（古今集・雑上・八七八・よみ人しらず・題しらず）を始めとして、姨捨山や月とともに詠まれることが多い。平安時代には雪とともに詠まれる例はほとんどない。「や」は間投助詞。ここでは、歌の初句にあつて体言「さらしな」を受け、場面を提示し、詠嘆をこめる。 ○ゆきのうちなる松 雪に埋もれるようにして生えている松の木。 ○はかなきもの 歌に詠まれるはかないものとしては「夢」「露」「暁の別れ」などがあるが、変わらぬものの代表とされる「松」を「はかなきもの」とする歌は他に見られない。 ○つま 「つま」は配偶者（夫妻）や恋人の意。男性に対しても女性に対しても用いるが、ここでは女性（妻）をさす。

【通釈】

更級の、雪に埋もれていてその姿が見えない松の木よりも、なお頼みにな

らないのは、私が頼りにしている妻だ。

【別出】

『夫木抄』巻第二十九、一三八〇六番

(松)

家集

同(惠慶法師)

さらしなや雪のうちなる松よりはげしき物はわがたのむつま

『歌枕名寄』巻第二十五、信濃国、六六一七番

更級 佐良科 建保名所百首用此字 山河里

雪 一松

惠慶法師

さらしなや雪のうちなる松よりはるけきものはわがたのむつま

【考察】

「さらしなや」で始まる歌の多くが、『古今集』八七八番を本歌とするが、平安時代の私家集に、この歌句はほとんど見られない。

惠慶は姨捨山も月も詠まず、「雪」を詠む。兼盛の歌「さらしなあらしのみイのさむきみ山イやまべみ山イのうのはなはきえぬゆきかとあやまたれつつ」(夫木抄・夏一・二三

九五・平兼盛・家集、或所屏風、村上御時歌合)は、『兼盛集』では初句を

「あらしのみ」とするなど本文に揺れがあり、また、雪そのものを詠んでいるわけでもないが、卯の花を雪に見立て、更級と結びつけた歌として、一応指摘しておく。中世に入ると、「さらしな」が雪とともに詠まれる例も現れる。惠慶や兼盛の歌は、その先蹤とも位置づけられるであろう。

雪のうちの松は、「よのなかにひさしきものはゆきのうちにもと色かへぬ松にざりける」(貫之集・二七九)、「ゆきのうちにちとせかはらぬまつがえはひさしきころたれによすらん」(古今六帖・第四・二二七六・紀貫之・

いはひ)など、常緑樹なので雪に降られても色を変えず、不変のものとするのが一般的である。「年ふれど色もかはらぬ松がえにかかれる雪を花とこそ見れ」(後撰集・冬・四七五・よみ人しらず・題しらず)のように雪とともに詠まれた歌はあるが、不変のものとされる松を「はかなきもの」とする歌は惠慶歌以外にはない。「松」が「はかなし」と結びつかないため、『夫木抄』では「はげしき」、前田家旧蔵本と『歌枕名寄』では「はるけき」という異同を生じたのだろう。

「わがたのむつま」という歌句は『惠慶集』以外には見られないが、『惠慶集』二二二番歌「わかつまをまつともぬねなつのよのねまちの月もやかたふきぬ」には、「わかつま」(わがつま)という語句が見られる。二二二番歌は、「つま」と「まつ」とを連ねる言語遊戯的面白さがあるが(本試注一七(二二二)番【考察】参照)、この歌でも全く同じ趣向が看取されよう。

七〇 (二六五)

【本文】

くさまくらむすふたよりもなき冬はあられふるらんあまのあしやは

【校異】○ふるらんーふるらむ(前)

【語釈】○くさまくら 「むすぶ」に懸かる枕詞。○むすふたより(むすぶたより) 「たより」は、生活をささえるもの、生きていくよりどころ。また、手紙の意も掛ける。○あまのあしや 「あま」は海人。漁師。

「あしや」(葦屋)は葦で屋根の葺いた粗末な家。「あしや」は撰津の国の歌枕であるが、「あまのあしや」で下賤の海人が住む粗末な小屋をさすと見

る。

【通釈】

草を結んで枕とするすべもなく、手紙もこない冬には、霰が降っていることだろう、海人が住む粗末な家では。

【別出】なし

【考察】

霰の歌は、勅撰集では「み山にはあられふるらしとやまなるまさきのかづらいろづきにけり」（古今集・大歌所御歌・一〇七七・とりものうた）、「霰ふるみ山のさとのわびしきはきてたはやすくとふ人ぞなき」（後撰集・冬・四六八・よみ人しらず・題しらず）、「すぎのいたをまばらにふけるねやのうへにおどろくばかりあられふるらし」（後拾遺集・冬・三九九・大江公資・あられをよめる）などの例が見られ、中世になると、さらに多く詠まれるようになる。『恵慶集』では、二・三六番歌でも霰が詠まれており、同時代の例としては、「霰ふるみねの山べの榊葉にゆふかけてこそくれはかへらめ」（信明集・四二二）、「かぜさわぎあられふりしきさむきよになにをあかずとむすぶこほりぞ」（好忠集・三四九・十二月中）、「あられふるみやまがくれのさねかづらくる人見えでおいにけるかな」（順集・九九）が見える。「みやまべに雪や降るらん外山なるしばのいほりにあられふるなり」（和泉式部統集・五二一・冬のはじめ）は、「しばのいほり」に、恵慶歌の「あまのあしや」と共通する、粗末な小屋のイメージがある。

「あまのあしや」は、「風ふけばあまのあしやのほふしこそみだれてものはおもひますらし」（能宣集・三二〇・じじうのうちにさぶらふほどに、八月のあきのいみじくしたれば、すみよしをおもひやる、かしらもいたう山

きとほたれて、心ぼそしとおもひて、ひめぎみのあるところ）以外、用例が見あたらない。能宣の歌は、京を離れて住吉に住む、『住吉物語』の主人公の姫君について詠んだもの。『住吉物語』は諸本の異同が大きい、白峯本では住吉の描写の中に「海人の磯屋」の語句があり、冬のわびしさが記されている。恵慶は、能宣のように『住吉物語』について歌を作ったわけではないが、能宣が用いた「あまのあしや」の語句を、そのままこの歌で使ったのだろう。中世の和歌では「あま」と「あしや」とがともに詠まれることも多く、「つれづれとあしやのあまのをぐしさす五月雨がみやほさでぬぬらん」（夫木抄・夏二・三〇二・藤原家隆・五月雨歌中）などがある。

この歌の下句では「あられ」「あま」「あしや」と「あ」の音が続く。このように同音を重ねる歌も『恵慶集』にはしばしば見受けられる。

附記

本試注は、筑紫平安文学会で行っている『恵慶法師集』輪読の成果の一部である。既発表分については、以下を参照されたい。

「〈恵慶百首〉春部試注」『純真紀要』第44号、二〇〇四年三月

「〈恵慶百首〉夏部試注」『純真紀要』第45号、二〇〇四年十二月

「〈恵慶百首〉秋部試注」『活水論文集』第48集、現代日本文化学科編、

二〇〇五年三月

「〈恵慶百首〉冬部試注」『活水日文』第47号、二〇〇五年十二月

「〈恵慶百首〉恋部試注」『純真紀要』第46号、二〇〇五年十二月

「〈恵慶百首〉浅香山春夏部試注」『文藝と思想』（福岡女子大学）第七十

集、二〇〇六年二月)

なお、用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2 とともに、

竹田正幸作成の文字列解析器「e-CSA」 Ver.1.04 を使用した。